

# 中学校特別支援学級におけるグループ学習による外国語学習に関する実践的研究

越井 絵美

## I 問題と目的

外国語学習においては、コミュニケーションや異文化理解を行うことが大きな目的としてあげられる。特別支援教育においては、それらは将来に渡って人と人との良好な人間関係を築いたり互いを認め合う態度を育てたりすることにもつながる。そして、それらは障害のある子どもにとっては生きる術となり(伊藤,2010)、また障害に対する相互理解を深めことにもつながる。

コミュニケーションや異文化理解は、他者との関係の中で学ぶものであり、その学びの集団づくりも重要な課題である。特別支援学級においては交流授業における大集団の中での一斉授業や特別支援学級での個別指導が中心に行われる。しかし、人との関係づくりの基礎を学ぶ上では、身近な存在である特別支援学級に在籍している生徒同士のグループ学習による学びが求められている(岡・広瀬,2000)。また、一般的にグループ学習の形態の一つとして協同学習があげられ、その際にはもちろん対人関係やコミュニケーションなどに困難を抱えている子や、学ぶ速度が遅い子など、特別な支援を必要とする子どもとの協同学習には配慮と工夫が必要である(江利川,2012)。

近年、自閉症圏内の子どもたちと心因的な原因からくる集団不適応を起こしている子どもたちの両方が同じ学級に在籍したり、知的障害児と知的な遅れのない自閉症・情緒障害児が同じ学級に在籍したりするなど、障害種別を超えて多種多様な児童生徒が混在する学級が増え(群馬県総合教育センター,2010)、それぞれの生徒の発達特性に応じた支援も求められ、お互いに学び合い相互理解できる場や活動が求められる。

本研究は、中学校特別支援学級に在籍する発達特性の異なる生徒を対象として、外国語の授業において生徒同士や外国人講師とかかわりをもつことのできるグループ学習を設定し、そこでの学習の変化からコミュニケーションや異文化理解を促

す授業内容や支援方法を検討することを目的とした。

## II 方法

### 1 対象者

対象者は、A 中学校特別支援学級に在籍する1年生の男子生徒2名(生徒 B、C)と女子生徒2名(生徒 D、E)および2年生の女子生徒1名(生徒 F)の計5名である。

生徒 B は広汎性発達障害と診断されている1年生の男子生徒、生徒 C は広汎性発達障害(自閉症)と診断されている1年生の男子生徒、生徒 D は知的発達に遅れのある1年生の女子生徒、生徒 E は知的発達に遅れのある1年生の女子生徒、生徒 F は広汎性発達障害と診断されている2年生の女子生徒である。

### 2 研究の全体構成

第1期：実態把握期間として X 年4月より X 年10月の間、A 中学校特別支援学級にて外国語の授業の観察・参観を行い、各生徒の発達特性、外国語の学習状況、コミュニケーションの様子、異文化に対する興味・関心や、学級内での生徒同士のかかわり合いの状況等を把握した。

第2期：実践期間として X 年10月より X 年11月の間、A 中学校特別支援学級にて、筆者(以下、T2)が主指導者として計5回の外国語の授業を行った。

### 3 分析の方法

ビデオカメラの記録やプリントの内容から、対象者の外国語学習に対する取り組みやかかわり合いの変化を分析の対象とした。

### 4 倫理的配慮

対象生徒の保護者に対し同意を得た上で実施した。また大学の倫理委員会の審査も受けている。

## III 結果

### 1 第1期：実態把握期間

対象者は、小学校での外国語活動で学習経験があることもあり、基本的なあいさつや単語の学習

に意欲的に取り組んだ。また、書字に困難のある生徒が多く、実施したアンケートなどからも生徒自身も苦手意識を感じていることがわかった。一対一での生徒のかかわり合いはあるが、生徒同士が1つのことに関してかかわり合う場面はあまり見られないことや、生徒Cはほとんど自主的に活動に入ったりかかわりをもったりしないことなどが把握できた。グループ学習成立への支援方法の検討としては、生徒Cを周りの生徒が支援することで、グループ学習としてお互いに協力して学ぶことにつながるのではないかと考えた。また、授業では、コミュニケーションや、異文化を体験的に学べる場の設定や、学習者の自己理解や他者理解を深める視点が求められた。

## 2 第2期：実践期間

### 1) 第1回 活動内容

①いろいろなあいさつ表現 ②全5回の活動のながれの確認 ③自己紹介について考える ④自己紹介シート作成 ⑤振り返り

### 2) 第2回 活動内容

①前時の振り返りと本時の活動のながれの確認 ②自己紹介シート作成その2 ③自己紹介練習(相互評価) ④振り返り

### 3) 第3回 活動内容

①前時の振り返りと本時の活動のながれの確認 ②自己紹介文の読みの最終確認 ③ALT への自己紹介 ④ALT による自己紹介と聞き取り ⑤ALT への質問タイム ⑥3枚の写真の説明⑦振り返り

### 4) 第4回 活動内容

①前時の振り返りと本時の活動のながれの確認 ②英語すごろくの練習 ③ALT と英語すごろくで交流

### 5) 第5回 活動内容

①前時の振り返りと本時の活動のながれの確認 ②ビデオによる振り返り(セルフビデオモニタリング) ③振り返りシート作成④外国語ビンゴゲーム

第1回と2回では、自己紹介活動として、紹介する内容を話し合ったり、発表練習を相互評価したりする活動を行った。生徒同士が相互理解でき

る場を設定することで、英語を話すことやコミュニケーションに課題のある生徒が、自分で表現し伝え、友だちの好きなことや嫌いなことにも関心をもつことのできる活動を行った。それにより、グループ学習でもかかわり合いが見られた。また、1枚のシートに5名の生徒が順々に感想を記入していく活動を行ったが、生徒の中には書字を苦手としている生徒も多いため、口頭でのインタビュー形式なども取り入れ生徒の書字に対するストレスを軽減して活動に集中できるようにする必要があると考えられた。

第3回と4回では、2回に渡り ALT との交流を行い、ALT に対して質問をしたり、生徒と ALT だけで英語すごろくをしたりする活動を行った。ALT との交流活動では、体験的なコミュニケーションや異文化理解の場を設定し、ALT との交流に不安を感じるなど異文化に対する興味・関心をもてない生徒が、体験的な活動を通して英語を使うことの楽しさを感じられる活動を行った。非言語表現を用いるなど ALT に対するコミュニケーションの積極性や、グループで協力してかかわり合う場面が見られた。また、書字に苦手意識を感じている生徒に対し、英語の読みが印刷されたシートを用意したり口頭でのインタビュー形式を取り入れたりするなど、書字に対する負担を軽減し他の活動に対して余裕をもてるようにした。

第5回では、今までの授業の振り返りや、ビンゴゲームで英語以外の言語に触れる活動を行った。

## IV 考察

### 1 コミュニケーションする授業内容と支援方法

#### 1) 自己を表現する活動

加賀田(2012)は、外国語学習において、「私のアイデンティティ」「私の長所」「友情」「感謝」といった話題を軸として、学習者の自己理解や他者理解を深める視点が重要であるとしている。このことから、自己紹介活動では、生徒同士で趣味や部活動について話す場面を設定し、自分の好きなことを友だちに伝えたり、友だちの好きなことに関心をもったりする活動を行った。そうすることで、生徒間のコミュニケーション活動が促進された。

友だちから肯定的に受け止められた生徒は、その後、活動の中で自己表現の少ない生徒に対し、その生徒の興味・関心のある内容について問いかけるなどして友だちの自己表現を促すことができていた。

## 2) 必然性や責任感を感じられる活動

生徒とルールがわからない ALT のみで、英語すごろくを行うという場面を設定することで、教えるなど、支援する責任感を感じられるようにした。

活動の中では、生徒が率先してジェスチャーなど非言語表現も使用する場面も見られ「少しくらい間違っても、言葉が通じたら人とつながる」と感じることができていた。岡・広瀬(2000)は、活動の中でお互いがかわり合う場面設定により、グループ内での役割や他者を意識することを学ぶとしている。実践においても、ALT との活動において、生徒同士が協力し、ルールの分からない ALT と活動する場面が見られた。

## 2 異文化に興味・関心を感じる授業内容と支援方法

多様性を感じられる活動として、授業では、自己紹介活動を通して友だちの好きなことや嫌いなことを知り自分との違いに気づくことができ、ALT との交流を通して自文化との違いや異文化に対して興味・関心をもつこともできた。また、世界には英語だけでなく色々な言語や文化があることを伝えることで、生徒が今後の外国語学習に対して、「色々な言語を学んで外国を旅行したい」「独特の文化を学びたい」といった異文化理解の観点から目標をもつこともできた。

## 3 発達特性の異なる生徒が学ぶために

### 1) 活動に参加しない友だちに配慮できる活動

活動では、生徒の関心のある教材を設定し、活躍できる場面を多く設定した。そうすることで、他の生徒は、友だちの関心のある教材を優先して選択したり率先して支援したりする様子が見られた。グループ学習を行う上でも、全員が活動に参加することでやりとりが多く見られ一体感が生まれる。また、書字に苦手意識を感じている生徒に

対し、英語の読みが印刷されたシールを用意したり口頭でのインタビュー形式を取り入れたりするなど、書字に対する負担を軽減することで他の活動に余裕をもって取り組むことができたと考える。

### 2) 自尊感情を高める活動

グループ学習によって自己表現や達成感を体験できる場を設定していくことが求められ(岡・広瀬,2000)、授業では自分の「いいところ探し」を積極的に行い、自尊感情を高めていくことが重要である。授業内容には、学習者の肯定的な自己概念を高めることが大切である。生徒の発言や友だちへの手助けする場面を取り上げ、積極的に生徒の「いいところ探し」を行った。また生徒同士でも、友だちの英語の発音や難しい問題を解いたことなど「いいところ探し」を行った。そうすることで、自分の不得意なことを他に見せないようにする生徒が、周囲にすすんで助けを求める場面など、自らを肯定的に捉える場面が見られた。

## 4 グループ学習成立のために

### 1) 協力し合える活動

協同学習の基本的要素の一つとして互惠的相互依存(Positive Interdependence)があげられ、その方法の一つとして、Material structured によって扱う教材の数を制限することがあげられる(Olsen & Kagan,1992)。一つの教材を互いに共有しなければならない場が設定され、互いにその教材を中心にやりとりができたり、一つの課題を達成するために協力的な活動が行われたりする。活動の中では、Material structured として次の3つの場面を設定した。

①第1回の授業において、1枚の感想シートを5名で回して記入する。

②第3回の授業において、1枚の自己紹介聞き取りシートに ALT の自己紹介の内容を聞き取って書く。

③第4回の授業において、1つの「すごろくおたすけ Book」を全員で共有して使用する。

### 2) 自分からアクセスできる手段

グループの全員が、ある課題で生じた問題を解決できないとそのまま活動が停滞したり、そのま

Olsen, R. E. W.-B., & Kagan, S. (1992) About cooperative learning. C. Kessler (Ed), *Cooperative language learning*. 1-30. New Jersey: Prentice Hall Regents.